HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	大伴坂上郎女の大宰府時代
著者	小野寺，静子；ONODERA，Seiko
引用	北海学園大学人文論集(54)：170(一) -149（二二）
発行日	2013-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

大伴坂上郎女の大宰府時代

小野寺　静子

はじめに

大伴旅人は神亀四年（七二七）末ころ大宰帥として赴任し、山上憶良はその前年ころ筑前守として下向していた。筑紫における二人の旺盛な作歌活動は神亀五年六、七月ころから始まるが、その契機となったのが旅人に同行し大宰府に下っていた旅人の妻大伴郎女の死である。妻の死と同じころ別の訃報をうけ、それに答え旅人は次のような歌を作った。

世間（よのなか）は　空しきものと　知る時し　いよよますます
悲しかりけり（五・七九三）

この歌を受けて憶良は旅人の妻の死を悼む漢文序と「日本挽歌一首」（五・七九四～七九五の長反歌）を作り旅人に献上したことによって二人の大宰府における歌のやりとりが始まる。この旅人と憶良を中心とする作歌活動を筑紫歌壇と称したのは小島憲之氏であるが[1]、伊藤博氏はその適否は「歌壇」という語の概念規定によるが、「それを、『専門的歌人およびグループの和歌を契機として生ずる意識された一つの生活圏』という程度に解するならば」、そう呼んでも良いのではないかと述べ[2]、天平二年正月一三日に開かれた梅花の雅会、「讃酒歌」が披露された雅会などを筑紫歌壇の代表的なものとして挙げている。

その筑紫歌壇のただなかに旅人の異母妹・大伴坂上郎女が加わる。坂上郎女が大宰府に下向した年月は明確で

（一）

ないが、神亀五年旅人の妻・大伴郎女が没したことが契機となっていると考えてよいから、神亀五年中には大宰府に着いていただろう。坂上郎女の大宰府下向は、妻を亡くした異母兄・旅人、旅人の長男・家持の世話や教育が目的であろうが、当時妻でもない女性がそういう形で地方に赴くことは珍しい。渡瀬昌忠氏は、大伴郎女が旅人に同行したのは旅人が大宰帥として「神功皇后・応神天皇などの皇祖霊を祭祀しようとするとき、それを助けるべき厳媛＝巫女として朝廷から公認されて派遣された」のであり、坂上郎女はその後任として下ったとする見解を提示している[3]。この見解は、林田正男氏によって「当を得たものとみるべき」という評を得、「大伴旅人の正妻大伴郎女、異母妹大伴坂上郎女の大宰府下向は香椎廟の神を祭る厳姫（巫女）としての任を負っての下向であった[4]」と述べている。しかし、こうした形跡が二人の大宰府滞在時の記事として全く見えないのは不審である。

この時期、旅人の長男、大伴家持もまた大宰府に滞在していたことは、旅人の病の折、都から来た大伴稲公、

（二）

大伴胡麻呂を大伴百代、山口若麻呂とともに夷守の駅家まで見送ったとあり（四・五六七歌左注）、明らかである。ただ、家持が旅人とともに大宰府にきたのか、旅人に遅れ坂上郎女とともにきたのかは不明である。大宰府において帥旅人、旅人の男子、旅人の異母妹が集ったことになる。

大宰府に下ってからおよそ二年余の滞在を経て坂上郎女は天平二年一一月、旅人の大納言任命に伴い帰京の途につき（六・九六三、九六四題詞）、この年中には奈良の都に着いた。

この二年余に及ぶ坂上郎女の大宰府滞在時を大宰府時代と呼ぶことにする。

この時代、旅人の血縁者のほかに大伴を名告る人々として大監大伴百代、防人司佑大伴四綱、大伴三依もまた大宰府にいた。また、大宰府に使者として下向した大伴を名のる人には旅人の異母弟大伴稲公、甥大伴胡麻呂と大伴道足がいる。こうして見ると、大宰府時代、意外に多くの大伴を名のる人々が大宰府に集結していたことになる。

なお、大伴道足は大伴系図・伴氏系図では安麻呂の子とあり、公卿補任によれば、神亀六年二月「大弐」とある。続紀には長屋王の変の処理のため、同年二月一一日「弾正尹従四位下大伴宿禰道足を権に参議とす」（続紀）、三月四日従四位下から正四位下になる記事はあるが、大弐であったという記事はみえない。

同時期、山上憶良が筑前国守として赴任していた。「両者の邂逅とその旺盛な作歌活動こそが筑紫歌壇の形成をみる原動力とな[5]り、筑紫歌壇と称される歌の場が展開されたのである。帥旅人を取り巻く官人たちが展開した筑紫歌壇を目の当たりにしつつ、官人の世界とは一線を引きながら坂上郎女は筑紫歌壇の形成に関わったはずである。しかし坂上郎女の大宰府における活動は定かでなく、活躍のさまも殆ど伝えない。旅人が大宰府に、憶良が筑前国府に移り住んだことが、歌人としての二人に大きな影響を与えたということはたびたび言われることだが、同様に坂上郎女が大宰府に移り住んだことは、坂上郎女の歌作りに大きな影響を与えたに違いない。

本稿は大宰府時代の坂上郎女の作歌活動や筑紫歌壇とのふれあい、大伴と名のる人々との関わりをみることによって、大宰府における坂上郎女を探り、帰京後の坂上郎女をはじめ大伴家の人々の作歌活動の根底をなすものとして大宰府時代を位置づけようとするものである。

一　大宰府時代の大伴氏族

ここでは大宰府時代に大宰府に滞在もしくは下向した大伴家の人々の歌作りや坂上郎女との関わりのさまをみていく。上に挙げた旅人以外の大伴氏の人々が万葉集及び他の文献に見えるものを年代順に表示すると次のようになる。ただし、作歌年月がはっきりしていないものもあるので簡単にそれらについて述べておく。

巻四・五四九歌の大宰少弐石川足人の遷任にあたっての餞宴の歌である。旅人の名はここには出てこないが、少弐時代の石川足人の歌とそれに和した旅人の歌が巻六（九五五、九五六）に見えるから遷任の歌はそれ以後の歌となり、五四九歌から旅人の大宰帥時代の歌といえる。四綱の巻三・三二九～三三〇歌は直前に小野老朝臣の歌（三

二八）があるが、この歌は小野老が神亀六年三月四日に従五位下から従五位上に昇叙の際の歌なのか、大宰府に戻ってからの歌なのか定かでないところがあるが、神亀六年四月ころと推測しておく。

巻三・三九二歌の作歌時期についての手掛かりはないが、「梅」を詠むところから梅花の宴あたりを考えることができよう。以上をもとに大宰府時代における旅人を除く大伴氏の作歌活動および大宰府における動向を示すと次のようになる。

神亀五年末か六年初め　三依の歌（四・五五二）
神亀六年二月以後　大監・百代の歌（四・五五九～五六二）
坂上郎女の歌（四・五六三～五六四）
神亀六年二月　長屋王の変
四月ころ　防人司佑・四綱の歌（三・三二九～三三〇）
天平元年一一月八日　大監・百代（巻五・八一二歌の左注）
天平二年正月一三日　大監・百代の歌（五・八二三）
二年正月　大監・百代の歌（三・三九二）
天平二年六月　大監・百代の歌（四・五六六、五六七左注）、駅使・稲公（四・五六七左注）、駅使・胡麻呂（四・五六七左注）、家持（四・五六七左注）

（四）

この中でもっとも作歌活動、動向記事が多いのが百代で、大宰府時代のほぼ全時期に渡っている。神亀六年二月以後と目される、

大宰府大監大伴宿祢百代の恋の歌四首

事もなく　生き来しものを　老いなみに　かかる恋にも　我はあへるかも（四・五五九）
恋ひ死なむ　後は何せむ　生ける日の　ためこそ妹を　見まく欲りすれ（四・五六〇）
思はぬを　思ふと言はば　大野なる　三笠の社の神し知らさむ（四・五六一）
暇なく　人の眉根を　いたづらに　掻かしめつつも

逢はぬ妹かも（四・五六二）

大伴坂上郎女の歌二首

黒髪に　白髪交じり　老ゆるまで　かかる恋には
いまだあはなくに（四・五六三）

山菅の　実成らぬことを　我に寄そり　言はれし君
は　誰とか寝らむ（四・五六四）

は、百代と坂上郎女がかわした歌と考えて良いだろう。五六三歌は五五九歌を承けてのもので、二人は自らを老年としているがこの時二人はそのような年齢ではない。自らを年老いた身とし、この年になるまでこんな恋はしたことがないと歌い、恋を強調するもので戯れの心が働いている。百代の五六一歌を承け坂上郎女の五六四歌がある。五六四歌の「山菅の　実成らぬ」は恋が結実しないことを譬える譬喩歌の手法をとっている。こうした詠法は戯笑性に根ざしたものである。

これら二群の歌々が宴席での題詠的なものという歌の遊びに根ざすものとみるもの[6]や、坂上郎女を大宰府に迎えての歓迎の宴席の歌[7]と捉えられるように、坂上郎女もまた大宰府での宴席に列なり歌詠をなしているのである[8]。大島信生氏は「この百代歌（五五九）が元になって、坂上郎女歌（五六三）が作られ、さらに郎女歌が元になって沙弥満誓歌（五七三）が作られたと考えられよう」とする[9]。こう考えれば、この時期大宰府で作られた歌は直接の対象者をこえて人々の目に触れる機会を持ったことになる。

天平元年一〇月七日、百代が帥旅人の使いとなって「梧桐の日本琴一面」と書状、歌を都の藤原房前に届け、天平元年一一月八日付けの房前から旅人への書状と歌を預かり大宰府に戻っている。百代は公用で上京したのだろうが、それを利用して旅人と房前の使者となり両者の交情を深めるために旅人の良き下僕として尽力している。

梅花の歌三十二首　并せて序

我が園に　梅の花散る　ひさかたの　天より雪の
流れ来るかも　主人（五・八二二）

梅の花　散らくはいづく　しかすがに　この城の山
に　雪は降りつつ　大監伴氏百代（五・八二三）

これらは天平二年正月一三日の梅花の宴での歌である。百代の歌は主人・帥旅人の歌を承けてのものだが、

（五）

旅人歌の落梅の景に疑念を向ける歌となっている。主人側に立つ百代がこうした歌詠をなすことについて、此処かしこに降っているとして旅人の歌に調子を合せたとも（全注）、野卑をよそおった風流歌で百代は誰よりも風流人であったといってよいかもしれない（釈注）ともされる。また石田正博氏は百代の歌は「上座と下座の両座を取り持つ」、「相伴側冒頭歌としての意義が認められる」歌とし、百代の大宰府の官人としての立場と責任を果たした歌とする。[10] 百代は旅人を引き立て、場に応じ自分の立場を自覚した歌詠をなしうる人であったことになる。

作歌年次については記さないが、梅花の宴の後に作られたと思われる巻三「譬喩歌」部に、

大宰大監大伴宿祢百代の梅の歌一首

ぬばたまの　その夜の梅を　た忘れて　折らず来にけり　思ひしものを（三・三九二）

がある。この歌の「その夜」というのは、梅花の宴が開かれた天平二年正月一三日の夜のことで、この歌は坂上郎女に贈った歌ではないだろうか。「梅」は女性を、「折らず来にけり」は女性と結ばれることのなかった恋を譬え、その恋を遂げなかったことを後悔する歌で、一首はあの夜、ついうっかりあなたと逢わないで帰ってきてしまいました、愛していたのに、という意味になる。梅花の宴で百代は坂上郎女をみたものの、そのまま帰ってきてしまったことを後に歌にして、坂上郎女をまじえた宴席などで披露した可能性が高い。百代には先にあげた坂上郎女とかわした戯笑歌と目される歌群もあり、この歌も坂上郎女を対象とした戯歌であろう。

（六）

天平二年六月、帥旅人が「瘡を脚に生し、枕席に疾苦」んだ時、旅人の遺言を聞くため庶弟稲公、姪胡麻呂が下向したが、旅人の病が癒えたので都へ戻るにあたり百代は少典山口忌寸若麻呂、家持らと共に「夷守の駅家」まで二人を見送り「聊かに飲みて別れを悲し」んだ歌を作っている。

大宰大監大伴宿祢百代ら、駅使に贈る歌二首

草枕　旅行く君を　愛しみた　ぐひてそ来し　志賀の浜辺を（四・五六六）

右の一首、大監大伴宿祢百代

周防にある　磐国山を　越えむ日は　手向よくせよ

荒しその道（四・五六七）

右の一首、少典山口忌寸若麻呂

百代の歌からは帰京する二人をねぎらい、志賀の浜辺まで同行し心をこめて見送ろうとする姿勢が感じとれる。都からの使者を送るにふさわしい礼を尽くした歌で、百代はやはりその立場をよくわきまえた歌を作っている。百代とともに「夷守の駅家」まで赴いた家持はこの時一二歳である。百代は旅人のために下向した二人の親族の見送りに家持を連れ「夷守の駅家」に向かった。旅人の長男としての立場を自覚させるものであったろうと考えると、百代は大宰府時代の前時期を通して、もっとも旅人、坂上郎女、家持の面倒を見ていた存在であった。

百代のこうした公私にわたる帥への尽力を考えると、坂上郎女にもそれなりの配慮を怠らなかった姿を想像することができる。坂上郎女との歌群も戯歌をかわす立場に徹したもので、大宰府時代の坂上郎女の戯歌性を担った人といえる。が、百代と旅人や家持との系譜上の繋がりは不明である。

大伴四綱は梅花の宴には名を連ねていないが、大宰府時代、防人司佑として下向していた。四綱も旅人や家持との系譜上の繋がりは明確でないが、大伴を名のる人として旅人、家持、坂上郎女とは百代とともに大宰府の他の官人たちよりも親しい関係にあったろう。四綱の歌として巻三雑歌中に、

防人司佑大伴四綱の歌二首

やすみしし　我が大君の　敷きませる　国の中には
都し思ほゆ（三・三二九）

藤波の　花は盛りに　なりにけり　奈良の都を　思ほすや君（三・三三〇）

がある。三二九歌は大宰少弐小野老朝臣の「あをによし奈良の都は　咲く花の　薫ふがごとく　今盛りなり」（三・三二八）を承けてのものといわれるが、三二八歌が小野老の神亀六年三月従五位上昇叙を祝う都にいての宴での作[11]なのか、伊藤博氏が述べるように大宰府での雅宴の作なのか問題のあるところである。「今盛りなり」からは都にいての感慨という印象は否めないが、四綱の第一首は伊藤氏の述べるように、小野老の歌を承け第二首で老の表現を承けつぎ「君」である旅人へと引き継いだもの[12]

とみることができよう。「奈良の都を　思ほすや君」と歌いかけられた旅人は、「我が盛り　またをちめやも　ほとほとに　奈良の都を　見ずかなりなむ」(三・三三一)に始まる「帥大伴卿の歌五首」で応じる。四綱の歌には宴席で旅人に問いかける配慮や旅人の立場を重んじ歌を誘う姿勢が伺える。

天平二年冬、旅人が大納言となって上京することになった時、大宰府の官人たちは蘆城の駅家で送別の宴を開いた。

大宰帥大伴卿、大納言に任ぜられ、京に入らむとする時に、府の官人ら、卿を筑前国の蘆城の駅家に餞する歌四首

み崎回の　荒磯に寄する　五百重波　立ちても居ても　我が思へる君(四・五六八)

右の一首、筑前掾門部連石足

韓人の　衣染むといふ　紫の　心に染みて　思ほゆるかも(四・五六九)

大和辺に　君が立つ日の　近付けば　野に立つ鹿もとよめてそ鳴く(四・五七〇)

右の二首、大典麻田連陽春

月夜良し　川の音清し　いざここに　行くも行かぬも　遊びて行かむ(四・五七一)

右の一首、防人佑大伴四綱

この題詞をめぐっては、蘆城の駅家と大宰府との位置関係、蘆城の駅家での餞宴が予餞であったのか帰京途上の餞宴であったのかという問題がある。この時憶良は筑前守であるが、筑前掾・門部連石足は憶良にかわって詠じたのであろう。石足と麻田連陽春の歌を承けて、四綱は旅人と別れるこの夜を「月夜良し　川の音清」い聖なる夜とし、大宰府から去る者、留まる者共に楽しもうと締めくくっている。防人佑は従七位下、大典は正七位上、筑前掾は従七位上相当官であるから、最も下位にある四綱が宴を締めくくっているのは、旅人との親近さによってであろう。

大伴三依もまた大宰府時代、大宰府にいた。

大伴宿祢三依の歌一首

我が君は　わけをば死ねと　思へかも　逢ふ夜逢はぬ　夜二走るらむ(四・五五二)

後に家持と紀女郎の贈答歌にみえる「わけ」を歌語として使う例はこの三依の歌をもってはじまる。三依は当時いかなる立場で大宰府に下っていたのかは不明である。三依の大宰府下向は何らかの任についてのものだろうし、また歌から推すにこのとき初々しいとはいえない。当時二十代半ばであったろうか。この歌は大宰府での宴で坂上郎女に向って歌われた歌で、自分を卑下しふりまわされる自分を演出し戯笑性をかもし出している。[13] 大宰府時代の戯歌として位置づけることができる。

天平二年六月、姪・胡麻呂とともに下向した庶弟・稲公は坂上郎女の同母弟であり、旅人の異母弟である。胡麻呂については伴氏系図に家持の子とあるが疑わしい。巻四・五六七歌左注には「姪（おい）」とあるからそれによれば田主か宿奈麻呂の子となろう。朝廷に「上奏」し二人が大宰府に下向したのであるが人選は旅人側によろうから、二人は旅人が遺言を託すにふさわしい人として選ばれたのである。一時的にせよ、旅人の一大事に坂上郎女の弟の稲公、坂上郎女にとっても甥にあたるらしい胡麻呂が大宰府に集い、大伴家の結束をはかることになった。この二人が大宰府に下った背景には、坂上郎女の意向が働いていただろうし、坂上郎女は十分もてなしたことが考えられる。

大伴道足は、天平二年擢駿馬使として大宰府に赴き旅人の家でもてなしを受けた（六・九六二左注）。道足は馬来田の子、伯麻呂の父で、御行や安麻呂とはいとこ同士にあたり大伴宗家と近い関係にある。天平二年に擢駿馬使とあるのは万葉集のみだが、旅人と同じく大伴を名のるという近さから任命され、大宰府にきたのであろうか。旅人は大宰府入りした同族の重要な一人である道足を「この日に会ひ集ふ衆諸」ともどももてなした。「衆諸」の中には坂上郎女もいて都からの同族の人との語らいの場を持ったはずである。

大宰府時代、大宰府の役人として、使者などとして大宰府に下向した大伴を名のる人々は旅人・坂上郎女のもとに集い歌の場を共有したり親族としての結束を確かめたことであろう。特に坂上郎女をとりまく歌の場では三依や百代によって、戯歌が展開されていったことは見逃せない。こうした場は旅人・坂上郎女の帰京後も続いた

（九）

ろうが、旅人は帰京後八ヶ月ほどで没し、また四綱をはじめ、旅人の帰京時いまだ大宰府に残っていた人もいることを考えれば、そうした場は旅人の薨去後のことになろう。

大宰府時代は筑紫歌壇が展開された時代に内包する。確かに坂上郎女が大宰府に滞在していた時、主に大宰府を舞台に旅人と憶良を中心とした歌の場が華々しく展開している。が、坂上郎女に関していうなら、筑紫歌壇の形成者としての姿は明確でない。したがって、坂上郎女を筑紫歌壇の形成者として位置づけることは難しい。筑紫歌壇の成果を収める巻五は大宰府や筑紫の官人の世界の展開であり、殆どが自分や相手がどのような官職にあるかを明記する。そうした立場にない坂上郎女の歌は筑紫歌壇の一員として、その活躍を巻五に収められることはなく、僅かに巻四・五六三〜五六四に見えるのみで、他は巻六の帰京途上の、

（天平二年）冬十一月、大伴坂上郎女、帥の家を発ちて道に上り、筑前国の宗像郡の名を名児山といふを越ゆる時に作る歌一首（六・九六三）

（一〇）

同じ坂上郎女、京に向かふ海路にして、浜の貝を見て作る歌一首（六・九六四）

が、明確なものとして残る。

しかし、坂上郎女が筑紫歌壇の一員として活躍しただろうことは推測でき、坂上郎女の存在そのものが、筑紫歌壇の歌作りを推進するものであったことが想像できる。

二　帰　京　後

大宰府から帰京後の百代の歌は万葉集にはない。百代の大宰大監の任が解けたのは何時のことか不明だが、天平一〇年閏七月七日、「外従五位下大伴宿禰百世を（兵部）少輔」とある。大監は正六位下相当官であるから天平一〇年閏七月の外従五位下は、大監と少輔の間に昇叙があったことになる。天平五年ころ大監から何らかの任についた折、正六位下から外従五位下になり、上京したのであろう。天平一三年八月九日外従五位下で美作守、一五年一二月二六日始めて筑紫に置かれた鎮西府の副将軍

となるがこの時も外従五位下、天平一八年四月二二日外従五位下から従五位下に、九月二〇日従五位下で豊前守、一九年正月二〇日従五位下から正五位下（以上、続紀）に叙せられた記事を最後に続紀にも名前を残さない。かりに天平五年、外従五位下になったとしたら二三年間外従五位下であったことになる。この間、官職に異動があったにもかかわらず位に変化がなかったことは異例である。大宰府時代は、旅人に近侍し立場をわきまえた歌を作る人であったが、帰京後は大伴家宗家とは交流をもたなかったようだ。帰京後の歌が万葉集に一首も留めないこともそのことを語るものだろう。百代の歌について神堀忍氏が「実務家が、ときに応じて、率無く既習の詞句をほどよく按排した風の類型的なもの」[14]と指摘する通りかもしれないが、あれほど旅人、坂上郎女と近い立場で活躍していたにもかかわらず、大宰府からの帰京後、家持らと交流を持った気配がなく、何故なのか不思議である。

四綱の帰京後の歌として巻四・六二九歌があるが、この歌の前の歌（四・六二一～六二二）が天平四年八月の歌といえるので、天平四、五年ころ後には帰京していたようである。官人歴名に天平一〇年四月大和少掾とあるというから、このころの可能性もある。六二九歌は次に示すように娘子と佐伯宿祢赤麻呂との贈答歌群中にある。

娘子、佐伯宿祢赤麻呂に報へ贈る歌一首

我が手本　まかむと思はむ　ますらをは　をち水求め　白髪生ひにたり（四・六二七）

佐伯宿祢赤麻呂の和ふる歌一首

白髪生ふる　ことは思はず　をち水は　かにもかくにも　求めて行かむ（四・六二八）

大伴四綱の宴席の歌一首

なにすとか　使ひの来つる　君をこそ　かにもかくにも　待ちかてにすれ（四・六二九）

佐伯宿祢赤麻呂の歌一首

初花の　散るべきものを　人言の　繁きによりて　よどむころかも（四・六三〇）

四綱の歌は、娘子と佐伯宿祢赤麻呂との歌群と一見かかわりがないように見えるが、同一の宴席で詠じられたものとする見解がある。このことを最初に指摘した橋本

（一一）

四郎氏は、六二九歌の「かにもかくにも」は六二八歌の「かにもかくにも」を語の意を転じつつ承けたもので同じ宴席での歌の可能性が高く、六二九歌は娘子役を買って出て拒否の態度を積極的に相手に求める方向に転じた歌ととらえる。[15] 六二七歌から六三〇歌はある宴席で娘子と佐伯赤麻呂の戯笑性のある歌が披露され、それを承けて四綱が娘子の立場にたって和し、その四綱の歌に赤麻呂が唱和した、という構成なのであろう。大宰府時代の坂上郎女を中心とする歌の一つのあり方、戯歌性を指摘できる。

四綱の歌は、宴席での歌である、女性の立場に立っている、使いを歌っているという特徴があるが、このことは巻八の一四九八、一四九九歌に通じる。

大伴坂上郎女の歌一首

暇なみ　来まさぬ君に　ほととぎす　我かく恋ふと行きて告げこそ（八・一四九八）

大伴四綱の宴に吟ふ歌一首

言繁み　君は来まさず　ほととぎす　汝だに来鳴け朝戸開かむ（八・一四九九）

（一二）

一四九八、一四九九歌ともにミ語法ではじまり、二句目で来ない君を歌い、三句目で「ほととぎす」が登場し、その「ほととぎす」に乞い願ったり命令したりして閉じるという構成を持ち、両首が密接な関わりの中で詠まれたものであることを示す。坂上郎女の歌に対して「言繁き故に「君は来まさず」なのだと、坂上郎女と「来まさぬ君」を恋仲にあるものとして歌い、恋情を設定する。四綱の歌は「君は」とあるように、女性の立場に立ったもので一四九八歌を承けて、より宴席の場を盛り上げる働きをしている。二首は同じ場で歌われた歌と考えてよいだろう。一四九八歌に対して、「実際の恋とは関わりなく、内輪の宴席などで詠まれた歌とすれば題詠であろう」（全歌講義）とする見解がある。その宴席の場はおそらく坂上郎女が主催者であるようなもので、その宴に欠席した一族の誰かを主題として坂上郎女と四綱が歌ったのだろう。

大宰府から帰京後、四綱は大伴家との交流をもち大伴家での宴に参加し歌を作っている。戯笑性を持った後期万葉の社交性のある歌風は、坂上郎女をとりまく万葉歌

の世界によく合っていて、その実現者としての役割を充分果たしている。

大伴三依も大宰府から何時帰京したか不明である。続紀には大宰府赴任の記事はなく、天平二〇年二月一九日、正六位上から従五位下に昇叙の記事で初めて名が見える。その後は天平勝宝六年七月主税頭、宝字元年六月三河守、三年五月仁部少輔などの記事が見え宝亀五年五月没している。

大伴宿祢三依の別れを悲しぶる歌一首

天地と　共に久しく　住まはむと　思ひてありし家の庭はも（四・五七八）

は、大宰府で帰京する旅人を送った歌とも解されるが、五七七歌からは旅人の帰京後の歌であるから五七八歌も奈良にいての歌であろう。そうすると三依の帰京はほぼ旅人と同じ頃で、三依の大宰府下向自体、官人としてというより資人のような立場で旅人に同行したのではという印象をうける。この歌は旅人薨後、大伴家を去るに当たって家持や大伴家の人との別れを歌った歌であろう。

大伴宿祢三依、離れてまた逢ふことを歓ぶる歌一首

我妹子は　常世の国に　住みけらし　昔見しよりをちましにけり（四・六五〇）

大伴坂上郎女の歌二首

ひさかたの　天の露霜　置きにけり　家なる人も待ち恋ひぬらむ（四・六五一）

玉守に　玉は授けて　かつがつも　枕と我は　いざ二人寝む（四・六五二）

六五〇歌は大伴家の宴席で久しぶりに坂上郎女に逢い詠まれた歌で、六五一～六五二歌は三依の歌に当意即妙に和した戯笑性の高い歌であろう。

六五〇歌と六五一～六五二歌が唱和の関係にあるとは、万葉集に記されていない。また歌語の面でも両者に共通性は認められない。しかし、それらがお互い贈答などの関係があることが示されていない場合でも、並ぶ複数の歌群が関わりを持つことが認められるものもある。また、歌語の上で関わりが認められないものでも、「その内容で受け答えになっていると考えられるものもあ」[16]り、特に後期万葉の贈答歌は共有句の有無のみで考えること

（一三）

ができないものがある。

三依の歌は、離れてまた逢ったことを歓ぶ歌で、「昔見しより　をちましにけり」と久しぶりに逢った相手が若々しいことを讃える。この歌の前は駿河麻呂と坂上郎女の起居相聞の歌であると明記されているので（六四九左注）、六五〇歌は駿河麻呂と坂上郎女の歌である六四六～六四九歌と関わりがあるとはみなしがたい。三依の歌はつづく六五一～六五二歌と唱和の関係にあったのであり、讃えられた人として坂上郎女を想定することが可能なのではないだろうか。

大伴宿祢三依、別れを悲しぶる歌一首

照る月を　闇に見なして　泣く涙　衣濡らしつ　乾す人なしに（四・六九〇）

この歌の直前に、「大伴坂上郎女の歌七首」（四・六八〇～六八九）がある。両群の関わりを考えることも可能だが、坂上郎女の歌は三依の「別れを悲しぶる歌」とは趣を異にする。三依の歌は宴席の歌かとする見解もあるように、三依が地方官として下向するにあたっての大伴家での餞宴の歌かと考えられる。[17][18]

（一四）

稲公は坂上郎女の同母弟で、坂上郎女が嫁した宿奈麻呂の先妻の子・田村大嬢と結婚しているので血縁的な繋がりも強く、大伴宗家や坂上郎女と格別に密接なかかわりを持った。稲公が贈った田村大嬢への恋の歌は坂上郎女の代作による（四・五八六）。また「典鋳正紀朝臣鹿人、衛門大尉大伴宿祢稲公の跡見の庄に至りて作る歌一首」の、旋頭歌「射目立てて　跡見の岡辺の　なでしこが花ふさ手折り　我は持ちて行く　奈良人のため」（八・一五四九）によれば、稲公は跡見の庄に滞在していることになるが、ここは坂上郎女も訪れている所である。この奈良人とはなでしこをこよなく好んだ家持のことであろう。紀朝臣鹿人には、「紀朝臣鹿人の、跡見の茂岡の松の樹の歌一首」（六・九九〇）、「同じ鹿人の、泊瀬川の辺に至りて作る歌一首」（六・九九一）もあり、これらも一五四九歌が作られたのと同じ時のものであろう。紀鹿人の跡見の庄訪問の目的は不明だが、稲公との交友をはじめ大伴の人々との交流が深かったことがわかる。

衛門大尉大伴宿祢稲公の歌一首

しぐれの雨　間なくし降れば　三笠山　木末あまね

く　色付きにけり（八・一五五三）

大伴家持の和ふる歌一首

大君の　三笠の山の　もみち葉は　今日のしぐれに散りか過ぎなむ（八・一五五四）

の稲公と家持の歌は、ある秋の日、大伴一族の宴席で披露された歌であろう。稲公の歌に家持が和したものであることは、題詞で明瞭である。

稲公とともに大宰帥旅人を見舞った胡麻呂は、天平勝宝二年九月遣唐副使となり、同四年閏三月餞宴が大伴古慈悲の家で開かれ、同族の人々らが集まり胡麻呂を寿ぐ歌などが歌われた（十九・四二六二～四二六三）が、万葉集には胡麻呂自身の歌はない。また道足自身の歌も万葉集に一首もなく、歌人としての活動のさまを探ることはできない。

三　坂上郎女の歌にあらわれる大宰府

大宰府で坂上郎女は旅人、家持だけでなく大伴家、大伴を名のる人々と交流をもつことになり、大宰府下向後の大伴家における坂上郎女の位置を確固たるものにしていった。しかし、坂上郎女の大宰府における活躍は殆ど伝えない。大宰府時代の坂上郎女の作歌は、さきにあげた大伴百代との歌くらいである。こうした状況について、大宰府が大陸文化を長く直接受け入れてきたことによって男性中心の様式が強く、坂上郎女は活躍の場を持ち得なかったのではないかと述べたことがある。[19] また、浅野則子氏は、坂上郎女には「官人であるおとこたちとは別の姿勢があったというべき」とし、うたうべきものは『都としての奈良』であった」と、うた表現のありかたから探っている。[20]

旅人や憶良が中心となって展開された文芸的な場は一般に筑紫歌壇といわれ、その特徴や形成者については述べられてきた[21]ところだが、筑紫歌壇、筑紫文学圏は旅人、憶良を中心とする文学活動ととらえるのが通常で、坂上郎女が筑紫歌壇の構成員として挙げられるのは「旅人周辺の人びと」としてでしかない。大宰府で展開された歌の世界で坂上郎女が活躍したということはほとんど認められていないといってよい。しかし坂上郎女が百代や三

依の歌にあるような歌の世界を展開したことを考えると坂上郎女の大宰府での歌の場での活躍、ひいては存在そのものにもっと注目してよいのではないだろうか。旅人や家持の傍らには坂上郎女がいて、大宰府の公人や大宰府を訪れた人々は坂上郎女と日常的に接触を持ったはずである。特に同族の大伴氏の人々との交流は見逃しがたい。

坂上郎女は帰京後、大宰府をどのように作品化しているだろうか。題詞で明記している次の歌がまず挙げられる。

大伴坂上郎女、筑紫の大城の山を偲ふ歌一首

今もかも　大城の山に　ほととぎす　鳴きとよむらむ　我なけれども（八・一四七四）

「筑紫の大城の山」とは、大宰府後方にある大野山のことである。この歌は、帰京後間もない天平三年頃の夏に詠まれた大宰府追憶の歌である。このように題詞や左注で大宰府回想の歌と明記しているものは他にはないようだ。

年月は不明だが、禁酒令下での親しい者同士の宴席が開かれたことを伝える歌群がある。

（一六）

大伴坂上郎女歌一首

酒杯に　梅の花浮かべ　思ふどち　飲みての後は　散りぬともよし（八・一六五六）

和ふる歌一首

官にも　許したまへり　今夜のみ　飲まむ酒かも　散りこすなゆめ（八・一六五七）

右、酒は官に禁制して偁はく、京中閭里に、集宴すること得ざれ、ただし、親々一二にして飲楽することは聴許す、といふ。これによりて和ふる人この発句を作る。

坂上郎女の歌は、大宰府で開かれた梅歌の宴での歌、

梅の花　今盛りなり　思ふどち　かざしにしてな　今盛りなり　筑後守葛井大夫（五・八二〇）

青柳　梅との花を　折りかざし　飲みての後は　散りぬともよし　笠沙弥（五・八二一）

年のはに　春の来たらば　かくしこそ　梅をかざして　楽しく飲まめ　大令史野氏宿奈麻呂（五・八三三）

春柳　縵に折りし　梅の花　誰か浮かべし　酒坏の

上に　壱岐目村氏彼方（五・八四〇）

や、

後に追和する梅の歌

梅の花　夢に語らく　みやびたる　花と我思ふ　酒に浮かべこそ　一に云ふ「いたづらに　我を散らすな　酒に浮かべこそ」（五・八五二）

に発想や歌語を学んでのものといってよいだろう。「思ふどち」の集中の初出歌は八二〇歌で、その後は天平一〇年一〇月一七日の奈良麻呂による集宴での家持の歌（八・一五九一）、大宮人の野で遊ぶ宴での歌（十・一八八〇～一八八二）、家持の越中守時代の歌にみえる。「思ふどち」は気のあった親しい者同士の意であるが官人意識に支えられた仲間意識を抱く同士の意に繋がる男性が用いる語である。一六五六歌以外、歌い手が女性である例はない。一六五六歌が男性的な詠みぶりを感じさせるのはそのためであろう。

また、

大伴坂上郎女の、親族と宴する歌一首

かくしつつ　遊び飲みこそ　草木すら　春は生ひつつ　秋は散り行く（六・九九五）

にも、八二一、八三三歌に通ずるものがあり、梅花の宴歌の影響は無視できない。大宰府時代、目の当たりにした梅花の宴の壮大でみやびな世界、そこで繰り広げられる歌の誦詠は帰京後、追体験的に坂上郎女の方法と歌の場によって再現された。

坂上郎女の歌に植物を歌ったものでは「梅」がもっとも多く三首ある。ついで「青柳」、「（花）橘」、「菅（の実）」の二首で、他は一首ずつである。「梅」がもっとも多い背景には、やはり大宰府時代の梅花の宴があろう。

一六五六歌以外の梅の歌は、

風交じり　雪は降るとも　実にならぬ　我家の梅を花に散らすな（八・一四四五、春雑）

沫雪の　このころ継ぎて　かく降らば　梅の初花散りか過ぎなむ（八・一六五一、冬雑）

である。二首は雑歌に収められるが、一四四五歌の「実にならぬ」がまだ成人になっていないことの譬え、「花に散らすな」は弄ぶことの譬えとし譬喩歌とする解釈があるように[22]、先にみた大宰府時代の百代の歌、巻三・三

（一七）

九二歌の手法との類似をみる。一六五一歌は、沫雪の中で咲く梅の初花を見ての歌で部立どおり雑歌である。「後に追和する梅の歌」中の、「残りたる　雪に交じれる　梅の花　早くな散りそ　雪は消ぬとも」（五・八四九）も雪に交じってある梅の花に早く散るなと、散る梅花を惜しんでいる歌である。八四九歌と一六五一歌は季節的には一致しないが、雪の中で咲く梅花が散るのを惜しんでいるという点では一致する。[23]

帰京後の大伴家圏の歌は、大宰府時代に交流のあった坂上郎女、四綱、三依、稲公、家持を中心に大伴駿河麻呂らの大伴家の人々に安倍虫麻呂、佐伯赤麻呂、紀鹿人、藤原八束、湯原王、市原王らが加わり、大宰府時代の梅花の宴をはじめとする宴における雅、戯の世界を範とし展開された。特に大伴家の人々を中心とする場では坂上郎女が主導者となり、やがて家持が主導者となってより広がりを持った歌の場が展開されていった。それは、天平一二年一〇月、聖武天皇が伊勢国に行幸しそのまま五年間の彷徨をつづけ家持が内舎人として同行した期間を除き、越中守として家持が奈良の都を離れるまで続いた。

（一八）

おわりに

坂上郎女がどのような事情で大宰府に滞在するに至ったかについて、旅人の後妻として、旅人や幼少の家持らの世話や旅人の寂寥を分かつため、大伴一族の「妻の座」（家刀自）をつとめるため、大伴家の「厳媛」として香椎廟の祭祀という公の任務のため、などが考えられている。それぞれに納得のいくことではあるが、坂上郎女が大宰府時代に作っているのは、巻四・五六三～五六四歌のみである。これは巻四の五四九～五七一歌までが旅人の大宰帥時代の歌群で、その中にあるから言えることである。がここには「大伴坂上郎女の歌二首」とだけあり、坂上郎女が大宰府にいての歌であるなどの記述は一切ない。巻六・九六三歌の「（天平二年）冬十一月、大伴坂上郎女、帥の家を発ちて道に上り、筑前国の宗像郡の名を名児山といふを越ゆる時に作る歌一首」によって、旅人の大宰帥時代、大宰府にいたことが明確になるわけである。

このように坂上郎女の大宰府時代、その活動を記すのはきわめて少ない。坂上郎女の大宰府における生活を推

し量るのは難しいのだが、右に挙げた九六三歌の題詞に「帥の家を発ちて」とあるから通常旅人の住む「帥の家」に住まいしていて、そこから帰途についたとわかる。

旅人の大宰帥時代、大宰府は第Ⅱ期の造営によって成ったものといわれる。第Ⅱ期の大宰府政庁建物の造営期間については幾つかの見解があるようだが、「約言すると和銅初年に着手し、霊亀年間おおかた竣工したとすると、あるいは養老に移るころまでには機構的な整備が一段落ついたといえる」という見解[24]によれば、霊亀からはじまり養老年間には建物も含めた大宰府政庁が完成したようである。旅人の大宰帥赴任はこの第Ⅱ期政庁建物が完成して後のことである。建造物は都宮の朝堂院形式を採用した礎石建物で、南門、中門、正殿、後殿、北門を南北に直線的に配置し、正殿から中門へ回廊がコの字形にあり、内庭部の東西に脇殿が各二棟並んで建っていたといわれる。ただし、正殿、後殿などの名称は、「文献に記された史料用語ではなく、いわば概念用語ないし宮都の中枢殿舎名や国府の中心建物からの準用にすぎない[25]」という。それぞれの建物が果した役割についても、準用して考えられることだが、「一つの正殿で政務と儀式・饗宴を兼行したといえる」、「正殿や脇殿を政務の場[26]」としたという。

坂上郎女は家持とともに府庁内の旅人と同じ建物で生活していたのであろう。それゆえ、「帥の家を発ち」という表現があるのだろう。鏡山猛氏は、旧太宰府府庁の庁域は、「南はいまの都府楼南門阯跡前を東西に走る県道を限り、東は月山東方の山下の小路、西浦塘（つつみ）に接する蔵司台地の断崖を以て限り、北は大野山の山脚に至るものとみて大過ないであろう」とし、南北2町、東西2町、方4町を以って府庁の四至としている。府庁の中心官建物である都府楼の西北の平坦な台地に建物があり、それは大宰府長官の正舎のようなものか、と推定している[27]。ただ、鏡山氏の条坊論は古く近年新たな条坊論が展開されているようである。坂上郎女は帥旅人や家持とともに都府楼の近くの「帥の家」に住まいし、大宰政庁や「帥の家」周辺に限られたものであったろう。

穂積皇子に嫁したことのある帥の異母妹・坂上郎女は大宰府では突出して雅びさをかもし出していたに違いな

（一九）

い。たとえ坂上郎女の名が宴などに名を連ねていなくても、坂上郎女の一足一挙が大宰府に集結する人々が注目するものであった。が、大宰府は官人の世界である。神亀五年冬一一月、旅人が香椎廟を参拝した際の歌が万葉集にあるが、その題詞に、

冬十一月、大宰の官人等、香椎の廟を拝みまつること訖はり、退り帰る時に、馬を香椎の浦に駐めて、各懐を述べて作る歌（六・九五七題詞）

とあり、「大宰の官人」としての行動である。この時、豊前国守宇努首男人も「行き帰り　常に我が見し　香椎潟明日ゆ後には　見むよしもなし」（六・九五九）という歌を作っているが、これは宇努男人が豊前守の任が解け帰京することを歌ったもので、旅人らとの過す最後の旅であったことになる。大宰府時代の盛大な雅宴、梅花の宴も筑紫の役人の集団の雅宴である。坂上郎女が表立ってよさそうに思われる場面においても、大宰府時代の坂上郎女の姿はなかなか見えない。百代の歌、三依の歌に坂上郎女をまじえた宴を想定することは出来るが、明記されてはいない。が、坂上郎女は大宰府で繰り広げられた

（二〇）

宴や歌の贈答のさまをしかと見、家持もまた父旅人と憶良が繰り広げる宴や交流のさまを心に刻む。坂上郎女の場合、大宰府から帰京後の天平四年ころから天平一二年ころまでの、大伴家の宴や歌の贈答の中心的な存在となって現れ、家持の場合は天平一八年八月ころから始まる越中守時代の池主との交流となって結実する。大宰府時代が大伴家圏の文学の形成と家持の旺盛な作歌をもたらした。

注

（1）「万葉集と中国文学との交流」『上代日本文学と中国文学　中』塙書房　39年3月
（2）「古代の歌壇」『万葉集の表現と方法　上』塙書房　昭和50年11月
（3）「大伴坂上郎女（序説）大宰帥の家へ」『万葉の女人像』上代文学会編、笠間書院、昭和51年5月
（4）「大伴坂上郎女の下向」『万葉集と神仙思想』笠間書院　平成一一年一〇月
（5）林田正男「万葉集筑紫歌壇――中央詩歌壇との対照――」『国語研究』3　昭和四九年一二月。『万葉集筑紫歌の

論』　桜楓社　昭和五八年一月所収

(6)　注2に同じ

(7)　賀古明「家持圏初期の歌風の特色――大伴坂上郎女の歌、その時と場――」『万葉集新論　万葉情意語の探求』　風間書房　昭和三九年六月

(8)　やり取りの歌々とはみない考えもある。久米常民「大伴坂上郎女の生涯と文学」『万葉集の文学論的研究』　桜楓社　昭和四五年三月

(9)　「大伴百代の恋の歌――巻四・五五九歌を中心に――」『万葉語文研究』4　和泉書院　二〇〇八年一二月

(10)　「梅花宴大伴百代歌の意匠」『万葉』178　平成一三年九月

(11)　林田正男「小野老小考――咲く花の歌をめぐって――」『国語と国文学』47―11　昭和四五年一一月、『万葉集筑紫歌群の研究』　桜楓社　昭和五七年七月所収。佐藤美知子「旅人帥時代の少弐たち――小野老の都讃歌を中心として――」『万葉集研究』12　塙書房　昭和五九年四月

(12)　伊藤博「歌壇・上代」『和歌文学講座』3　昭和四四年九月、『万葉集の表現と方法』上　塙書房　昭和五〇年一一月所収。原田貞義「都の花と筑紫の綿と――山上憶良の罷宴歌の周辺」『万葉集の世界とその展開』　平成一〇年四月、『読み歌の成立』　翰林書房　二〇〇一年五月所収

(13)　拙稿「大伴三依と大伴坂上郎女」『年報　新人文学』4　二〇〇七年一二月

(14)　「大伴宿禰百代」『万葉集歌人事典』雄山閣　昭和五七年三月

(15)　「佐伯赤麻呂と娘子の歌」『万葉集を学ぶ』3　有斐閣　昭和五三年三月

(16)　多田みや子「万葉後期贈答歌の様相――対応を支えるものをめぐって――」『文学・語学』94　昭和五七年七月。『古代文学の諸相』　翰林書房　二〇〇六年一月所収

(17)　釈注、全歌講義

(18)　注13に同じ

(19)　拙稿「大伴坂上郎女」『万葉集講座』第六巻　有斐閣　昭和四七年一二月

(20)　「坂上郎女の筑紫下向」林田正男編『筑紫万葉の世界』雄山閣　平成六年二月

(21)　小島憲之「万葉集と中国文学との交流」『上代日本文学と中国文学』中塙書房　昭和三九年三月。中西進「都府文学の形成者」『万葉集の比較文学的研究』中　桜楓社　昭和四七年三月改装版。林田正男「万葉集筑紫歌壇」　林田正男編『筑紫万葉の世界』　雄山閣　平成六年二月。大久保広行「果てなる意識――筑紫文学圏の基軸――」『文学論叢』71　平

（二一）

成九年三月。大久保広行「筑紫文学圏の世界――その集団性を中心に――」『上代文学』87　二〇〇一年一一月、『筑紫文学圏と高橋虫麻呂』　笠間書院　平成一八年二月所収

(22)　渡辺護「『花ニ問フ』と歌う意味――万葉集巻八・一四三八と巻二〇・四四四七の場合――」『岡山大学法文学部学術紀要』38　一九七八年一月、『万葉集の題材と表現』　大学教育出版　二〇〇五年一一月所収

(23)　理願挽歌(三・四六〇～四六一)は坂上郎女の唯一の挽歌である。この歌は新羅の国から日本に渡り大伴家に住まいしていた尼・理願が死去したため、当時、有間温泉に療養のため赴いていた大家・石川郎女に娘である坂上郎女が葬儀の様を歌にして送ったもので、純粋に挽歌とはいえないが坂上郎女が残す唯一の挽歌である。これは山上憶良の「日本挽歌」の長歌(五・七九四)に構成、歌語の面で負うところが大きい。

(24)　九州歴史資料館『大宰府政庁跡』「特論」　吉川弘文館　2002年5月

(25)　注24に同じ

(26)　注24に同じ

(27)　『大宰府都城の研究』　昭和四三年六月　風間書房

論中の万葉集は『万葉集　本文篇』『万葉集　訳文篇』(塙書房)によった。